

イシイ精機

音で割る
精度 1/1000 の世界

生産設備としての各種機械はほとんど進化し、NC化などほとんど当たり前の時代となった。しかし、それに伴って自動化が生産手段における主役となり、人の手が増えらる領域はますます狭まってきているといえよう。神の手といわれる職人の数が急速に減ってきているのは、そうした事情と無縁ではない。そんな状況のなかで、本当にきびしい精度をクリアし、高品質な製品を作り出すことができるのだろうか。モノづくりにあつては、人の手による技術の魂や息吹、また感性がなければならない。「音で割る 1/1000 の精度の世界」。世界トップクラスの性能を持つムーア・ツール社の治具研削盤（以下治具研）と「職人技」による研削加工技術で、ミクロの世界に挑戦しているイシイ精機（本社工場：横浜市都筑区川向町 922-42。堺裕之社長。電話＝045-473-7141）。小さな町工場でありながら、日本の製造業を支える中核として輝きを放っている。

「口は出さないが金も出さない」といわれ、創業者で現会長である石井建郎氏から堺裕之現社長（47歳）がその座を引き継いだのは5年前のことだ。石井氏は堺社長にとって義父であると同時に、職人としての腕を磨いてくれた良き先輩でもある。「会長の引き際は非常にきれいでした。意見の食い違いは当然ありますが、最終的にはすべて私に任せてくれています」（堺社長）。堺社長の夢は数学の教員になることであった。大学在学中に民間企業志向となり、大手コンピュータメーカーにシステムエンジニアとして就職することになる。その当時、銀行業

界は第三次オンラインが普及し始めた頃で、2年の研修期間を経て50人のプログラマーを管理しながら、ある都市銀行のシステム開発を担当した。しかし、初めて取り組む慣れない仕事と徹夜続きの毎日で、心身ともにボロボロの状態になってしまった。

13台の治具研削盤を設備

学生時代からの付き合いを経て、就職間もなく堺社長は石井会長長の長女と結婚していた。そのような縁もあり、彼れた姿を見かねて心配した石井会長の「いくら給料が良くても人間らしい生活ができないのなら考えた方がよい。うちに来ないか」という言葉もあり、当時の社名である石井精機製作所に入社することになるのである。1989（平成元）年のことだ。実は学生の頃から同社を知る堺社長にとって、一番就職したくない会社であったという。「仕事は背中で見て覚えるというような職人の世界で、何か職



堺 裕之社長

プレス成形加工

場が宇少しした雰囲気嫌だった」。

ここで少しイシイ精機の歴史を辿りたい。創業者は1968（昭和43）年で、フライス盤1台による部品加工がスタートであった。典型的な町工場ではあったが順調に成長し、1974（昭和49）年、米国ムーア社製の治具研削盤の1号機を導入、それを契機に研削加工が専業となる。堺社長が入社した頃には、マニュアル6台、NC1台の合計7台が揃えられ、入社後すぐにNCの2台目があつたという。そのNC2号機は、やがて堺社長が担当することになるのだが、機械加工に關してはまったくの素人。誰いだった職人に付きながら標準機によって治具研削の加工をイロハから学んでいくのである。

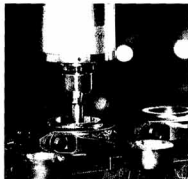
創業地は横浜市港北区日吉本町であるが、1980（昭和55）年に同じ港北区の新吉田町に移転している。2004（平成16）年に資本金を2000万円に増資して株式会社となり、社名も現社名のイシイ精機とする。「そして翌年、単なる町工場からの脱皮を図り「第二の創業」（堺社長）としてのスタートをするために、現在地に本社・工場を移すのである。従業員13名。保



研削加工現場

第8巻 第6号

有する治具研削盤は合計13台（うちNC8台）である。町工場の規模でこれほどの台数を設備しているのは日本のどこを探してもない。「辛い毎日であったが自分で選んだ道でもあるし、早く一人前になって機械を操作できるようにするという目標が支えとなった」と、堺社長はこの間の苦労を振り返る。



治具の研削加工



有限会社時代の旧社名看板